連載コラム　『夜より深い闇へのまなざし』（第2回）

齋藤理一郎　群馬県立前橋清陵高等学校（夜間部定時制）教諭（英語科）
・特別支援教育士（S.E.N.S）

夏休みを迎える子どもたち

この文章を書いている今は、夏休み直前です。猛暑の中、日が傾いた 17:30 に学校が始まる夜間部でも昼間の余熱がきついです。住宅街にある学校は、体育の授業はすべて体育館なので、よりいっそう暑さが堪えます。世間では、「令和の時代に、学校体育館はエアコンがないなんて！」とか言われますが、建物自体が昭和のものなので、断熱していない体育館で冷房を効かせても、電力の垂れ流しになってしまいます。学校の施設整備は、まずここから手をつけてほしい！

さておき。生徒は、この過酷な環境での学習から解放される夏休みが待ち遠しい様子です。「高校生の夏休み」と聞いて、みなさんはどんな生活を想像するでしょう。進路に向けた勉強で一生懸命ノートを書いたり、部活動でメンバー一丸となって汗をかいたり、長い休みを使った冒険で恥をかいたり、そんな個々が成長する時間を期待するかもしれません。「夏休みの予定は？」と自分のところの生徒に尋ねると、「アルバイトをたくさん入れます！」と明るい声が返ってきます。

バイトと家事と、ときどき勉強

夜間部は、全日制に比べてアルバイトをしている生徒が多いです。授業は夕方から始まるので、昼過ぎにのんびり起きて、宵っ張りな日々を送っているのかなと思うと、なかなかどうして、規則正しい生活を心がけているようです。アルバイトの時間を午前中から、中には早朝にシフトを入れている生徒もいます。おそらくアルバイト先では、家事があるパートさんは入れないし、全日制高校の生徒も入れない時間帯の大事な働き手となるのでしょう、「オレ、けっこう頼りにされているんっすよ」と語る生徒は、なんとも誇らしげです。学校ではほぼ同年代とのコミュニケーションが多いので、アルバイト先での多様な人たちとの人間関係づくりは、教科学習以上に大事な人生経験に映るようです。

こうしてアルバイトで手に入れたかけがえのないお金を、生徒が自分の将来の進路のために貯めていたら望ましいのですが、「家庭に入れている」ことが多いのは、気になるところです。実際、高校進学先として夜間部を選んだ理由として、「制服とか、修学旅行みたいな学校行事がなくて、家計の負担が小さいから」と言う話を少なからず耳にします。家庭も、子どもに高校卒業が必要なことは分かっているけれど、学校生活でかかる費用が厳しい。支出を抑えながら、アルバイトで有効に時間を使って収入を得られたらいい、と夜間部への進学を勧めているケースもあります。

家計の支え以外にも、家事の負担が大きいのも夜間部の生徒の傾向です。掃除や洗濯、炊事の他に、病気の父母の看病や、小さなきょうだいのお世話が、１０代の若者の両肩にのしかかってきます。休みがちな生徒が、もう一日も休めなくなってから頑張って登校していたのに、最後に、「お母さんが出かけているので、私が弟を病院に連れて行かなきゃならないんです」と欠席連絡してしたときは、やるせなさしかありませんでした。

無事な夏休みへの願い

登校が常でない生徒、いろいろと理由をつけては休む生徒を見ていると、僕らは「怠け・サボり」と思ってしまいがちですが、生徒が暮らす環境を考えると、「登校する条件がそろっている」のは、まさに奇跡なのではないかと思い直してしまいます。登校、勉強のルーティンから解放されることを喜んでいる生徒たちですが、家庭から解放されることはありません。およそ 40 日の夏休みの間に、環境が激変する生徒もいます。夏休み明け、ちゃんと登校できるかな？学校で見せる表情はどんなかな？早く来てほしいと同時に、その後への心配もつのる「夏休み」です。

（つづく）